

ヘルスプロモーションにおける参加型研究

PARTICIPATORY RESEARCH IN HEALTH PROMOTION

岡田加奈子¹⁾ James C. FRANKISH²⁾ Lawrence W. GREEN³⁾

Kanako OKADA

はじめに

ヘルスプロモーションにおいて参加型研究が用いられるようになったのには、いくつかの理由がある。まず、ヘルスプロモーションも参加型研究も人々が参加することによって自分たちの健康条件を改善することを提唱している共通点がある。また、参加型研究には他の伝統的な研究にはないヘルスプロモーションにとって重要な長所がいくつかある。従来はたいていの場合、研究者が研究プロセスの決定権を持っていたが、参加型研究は人々が積極的に参加すること、そして研究によってその人たちが恩恵を受けることが不可欠なのである。コミュニティメンバーは質問項目を決める段階から積極的に参加し、研究プロセスに大きな貢献をし、結果を研究者とともに解釈するのである。さらに参加型研究は、コミュニティに健康の専門家の視点を含んだ実践をもたらすものでもある。

参加型研究は、特定の方法でもなく、他の方法にかわる研究デザインでもない (Frankish, C.J. 1996)。これらの参加型研究の歴史は、似たようなアプローチはあるにしろ、日本においてはそれほど長くはないと考えられる。そこで本論では、カナダにおける研究結果 (Green, L.W. 1995) をベースにヘルスプロモーションにおける参加型研究を概観すると共に、参加型研究の重要な概念を示しているカナダにおけるガイドライン (Green, L.W. 1995) の日本への適応を模索することを目的とする。

参加型研究とは

本論では参加型研究を「教育、及び行動を起こすことまたは社会変化に影響をもたらすことを目的とした、参加者との共同作業による系統的な研究」と定義する。その参加型研究には一般に3要素が不可欠とされている。その3要素とは教育、アクションそして研究の3つである。教育とは、人々が健康問題を発見してから研究結果が出るまでの研究過程における学習をさす。アクションは、研究結果を踏まえての問題解決のための行動である。研究は、参加型研究がデータを系統的に集め、分析する研究プロセスが行動を起こすこと、または社会変化に影響を及ぼすことを目的としたものでなければならない。研究プロセスと行動を起こすまたは、社会変化に影響を及ぼすという2つのプロセスをつなぐために、健康問題の当事者、一般にはコミュニティと呼ぶが、その人たちの積極的な参加が参加型研究には必要なのである (Green, L.W. 1995)。

つまり参加型研究は、特定の方法論というよりは研究そのもののプロセスをさし、そのプロセスが重要なのである。

新井 (1996) は、「研究者がその問題に関わる人々の“思い”や“願い”に理解と共感を持ちながら、自身もその活動に参加し観察を重ね、問題解決のための方策の探求と実践を行なうことが特徴である。」と述べている。また、その思いを研究に生かしながら、研究プロセスの中で、コミュニティメンバーが自分たち自身の健康問題を査定する力を学ぶことが特徴ともいえるであろう。

また、その際のコミュニティとは、地理的な定義だけではなく、職業、住所、年齢、背景、健康問題等の同じ人

千葉大学教育学部 Chiba University¹⁾

Institute of Health Promotion Research, University OF British Columbia (Canada)²⁾

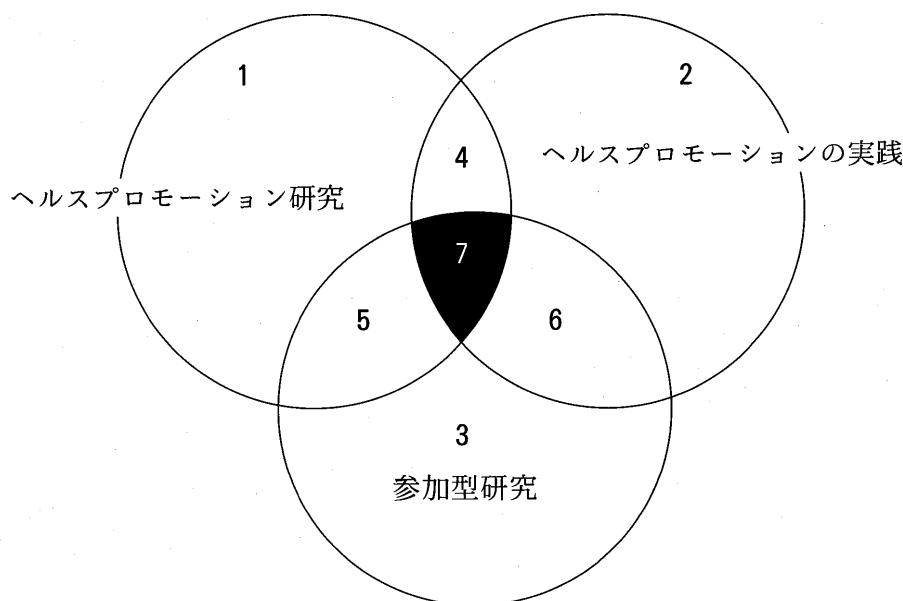
Office on Smoking and Health, Centers for Disease Control and Prevention US Dept of Health and Human Services (U.S.A)³⁾

などをさす用語とする。

歴史的に見ると、初期の研究ではそのコミュニティの人々と研究者の平等な関係が強調されたが、現在では個々の参加者（コミュニティ参加者と研究者等）のそれぞれの持っている固有の力と責任の共有が強調されている（Green, L.W. 1995）。

ヘルスプロモーション、ヘルスプロモーション研究及び参加型研究

ヘルスプロモーション、ヘルスプロモーション研究及び参加型研究の関係を図1に示す。日本においてよく言われる参加型保健活動は、ヘルスプロモーションの実践には計画段階で住民が参加しているが、研究的要素が少ないため6に入る場合が多いと考えられる。



- 1 より基礎的な疫学，社会学，行動科学，組織学，政治学，経済学
- 2 意図的な研究の存在しない応用的ヘルスプロモーション
- 3 ヘルスプロモーションと関係のない参加型研究
- 4 本質的には参加という概念のない行動研究
- 5 より応用的な参加を伴ったヘルスプロモーション研究，しかし，行動という概念が欠けている
- 6 計画段階で本質的な参加を伴ったヘルスプロモーション，しかし研究的要素が制限されている
- 7 ヘルスプロモーションにおける参加型研究

図1 ヘルスプロモーション、ヘルスプロモーション研究及び参加型研究
(Green, L.W. 1995)

用語の定義

歴史的には文献においても Participatory Research (PR), Participatory Action Research (PAR), Action Research (AR), Participative Research, Conscientizing Research, Policy Oriented Action Research, Dialectical Research, Collaborative Inquiry, Emancipatory Research, Participatory Action Learning Research, Participatory Rural Appraisal (PRA), and others (see Dilts, 1989) といった様々な用語がある（Green, L.W. 1995）。

Action Research (AR)という用語自体は、非常に早い時期から用いられているが、研究を行なう上で、コミュニティの参加ということが、それほど強調されていたわけではなかった（Lewin, K. 1946）。

Participatory ResearchとParticipatory Action Researchという用語を活字上で始めて公に用いたのはFals-Borda (1992)であるが、基本的には2つの用語を同義語と考えていた。しかし、Participatory Action Researchを用いる時にはActionの要素を強調したい時だという意見もある (Green, L.W. 1995)。

また、日本においては、参加型研究、参加的研究もしくは参加型行動研究 (Participatory Action Researchの和訳) という用語が用いられている (Green, L.W. 1995, 島根医大環境保健医学教室 1995, 新井宏明 1996, 塩飽邦憲 1997)。

我々はその中で、Participatory Research及び参加型研究という用語を使用することとした。また、Participatory Researchには、Participatory Action Researchという言葉を含むものとする。

日本における参加型研究

1993年から1997年に至る文献データベース : Medline, Cumulative Index of Nursing & Allied Health (Cinahl), 医学中央雑誌 により検索したところ、「参加型」、「参加的」又は、「Participatory」+「Research」+「Japan」の3キーワードが入っている文献は見られなかった。Researchを除いた2キーワードでは、3文献検索され、そのうちの1つは、ヘルスプロモーションに関する日本における大規模な研究の先駆けとして、島根医大環境保健医学教室が参加型研究の手法にのっとり、島根県出雲市において地域との連携をもったものであった (塩飽邦憲 1997)。つまり、日本において参加型研究は近似したアプローチはあるにしろ、実際にはまだそれほど多くなく、行われ始めた時期とっていいであろう。

カナダにおけるガイドラインの日本への適用

日本において参加型研究に関係している12名の研究者により、カナダのガイドラインを検討した。その結果、以下の様々な点が議論された。カナダにおけるヘルスプロモーションにおけるParticipatory Researchのガイドライン (Green, L.W. 1995) は、カナダでも指摘されているように、計画する際のガイドラインとしてまたは、Participatory Researchを実施した後の評価手段として用いられることも可能である。さらに、実際にParticipatory Researchに研究費を与える際の判断材料として用いられている。また、このガイドラインは研究者の倫理的側面にも用いることが出来ると考えられる。しかし、日本においては、Participatory Researchが広く実施されているとはいいたが、本ガイドラインの日本への適応を考える際に、評価の手段として用いるよりもガイドラインとして使用するを念頭に置いた方がよいと判断した。そこで研究者向けのガイドライン (Green, L.W. 1995) とコミュニティ向けのコミュニティガイドブック (Frankish, C.J. 1996) との統合をはかり、用語の選定、さらに日本における社会文化的背景と現状を考慮し、日本への適応をはかることを試みた。さらに、理解しやすいように各項目には説明と実例を提示した。ガイドラインは、6つの大項目 (数字で表示) の中にそれぞれ質問項目 (小文字アルファベットで表示) を表示し、さらに説明や実例を*で示した。

以下に日本への適応を考えたヘルスプロモーションにおける参加型研究のガイドラインの試案を示す。

<ヘルスプロモーションにおける参加型研究のガイドライン>

1. コミュニティの積極的な関与

参加型研究は、研究プロセスにコミュニティの人々が積極的に関わることが重要である。人々の経験に関連した健康問題を取り扱えば、研究はより有益で重要なものとなるであろう。また、コミュニティの人々の考え方を研究に取り入れることができれば、その結果はコミュニティにとって意味あるものとなるであろう。そのため研究は参加したい人が誰でに参加できるようにすべきであるし、コミュニティの積極的な参加が重要なのである。

a, コミュニティは定義されているか。

*ははっきりとコミュニティの定義を研究当初にすることが、研究を実施する上で大切である。

b, コミュニティメンバーは、研究テーマになんらかの経験や、関心があるか。

c, コミュニティメンバーは研究プロセスに参加する機会を与えられるか。

d, コミュニティ参加者が参加しにくい状況を取り除くための方法について話し合ったか。

*この場合参加をはばむものは物理的要因(たとえばミーティングの時間や場所が適切か)・心理的要因(着ていく服がないからいやな感じを持つ等)等様々である。

e, コミュニティとのパートナーシップのもと、研究問題を議論したか?

*研究者がなぜコミュニティの問題に対して研究を行なおうとしたか等、お互いの信頼のもとに参加型研究はなりたっているため、十分に理解し合えるように話し合うことが大切である。

f, コミュニティ参加者は、自分たちの考えを研究に生かすことができるか。

*コミュニティ参加者が研究を行なっていく上で、自分たちの考えを出したり、何か実際に行なったりすることができるか?

2. 調査質問項目の作成

Participatory Researchは基本的にはコミュニティが調査項目を選ぶべきであるという考え方がある。質問項目または研究者または調査者や保健婦等からも生み出される可能性がある。

a. 調査質問項目に関してコミュニティは自分たちの考えを積極的に提案したか?

*たとえば、エイズが多ければ、エイズのことには人々は興味をもつ。興味を持ち、何をどのように聞くか等、コミュニティは意見を述べたか?

b. コミュニティメンバーが興味をもっている問題であるか?

3. 研究の目的

研究結果はコミュニティにとって恩恵がなければならないというのが Participatory Researchの重要な考え方である。人々がもし研究プロセスで何かを学んだとか、何かを得たと確信したならば、研究のある部分に多くの貢献を行なうであろう。

a. 研究の目的の1つは、個人グループ、コミュニティのエンパワメント(学習)を促進することか?

b. コミュニティ参加者は、この研究に参加することによって、自分たちの健康をコントロールする方法を学ぶことができるか?

*研究はコミュニティ参加者と外部の人との間の共同作業を促進する可能性はあるか?

c. 研究の目的の1つは、コミュニティにエンパワーを与え、健康に影響を与える決定を呼びかけることか?

d. 研究は特定の健康問題を扱う時に、健康の政治的、社会的、経済的決定要素を含んでいるか?

*Health promotionはライフスタイルや健康行動に注意がいきがちだが、ライフスタイルを変えても不十分である。たとえば、smokingなら禁煙場所を広げ、自転車のヘルメット着用や自動車のシートベルト着用といった政治的な健康に関する決定要素の視点を研究には含むべきである。

4. プロセス

研究者もコミュニティ参加者もそれぞれが重要な情報をもっている。両者ともに Participatory Researchについて学び、研究に参加することによって研究はより実り多いものとなる。

つまり、Participatory Researchは結果とともに、プロセスが重要である。このプロセスとはコミュニティが学習を行ない、またsocial changeを導くものがあることが大切である。

以下の質問は、コミュニティメンバーと研究者が互いに研究プロジェクトを進めるあたって何を学ぶことができるかを質問している。

a. 計画・実行・評価の各段階でコミュニティ参加者の知識を十分活用しているか？

b. コミュニティ参加者が研究方法を学習するプロセスが含まれているか？

* 16才から18才の参加者によるある研究では、彼らが大学に来て統計パッケージ (SPSS) の使い方を学んだり、レポートの書き方、発表の仕方を学んだりした。

c. 研究者がコミュニティの健康問題を学ぶ機会が研究プロセスに含まれているか？

d. もし必要な場合には、研究方法やフォーカスを柔軟にするまたは、変更することができるか？

e. 研究を行なっている間に経験を評価する手段があるか (記録したり、話し合う場が設けられたりしているか) ?

* ある研究の会議では必ず、記録 (テープやノート) をとっていた。

何を討議したか？何が起こったか？また、感じたことも重要である。お互いの信用 (Trust) と尊敬 (respect) の中で参加型研究は成り立っている。

f. コミュニティ参加者は結果や結論の解釈に加わっているか？または加われるか？

5. 健康問題の解決

研究に参加することによってコミュニティメンバーは、健康問題そのものや、またそれをどのように改善するかを学ぶことができる。研究は、コミュニティが健康問題を解決することをサポートするものでなくてはならない。

a. コミュニティ参加者が学習する機会がたくさんあるか？

b. 研究によってコミュニティが何らかの健康問題を解決するための行動をおこす可能性があるか？

* アクションには、プロジェクトがコミュニティの人々の行動を促進するアクションとコミュニティの人々のアクションが含まれている。コミュニティメンバーのアクションとは、たとえばコミュニティの人が地域新聞をだしたり、様々なコミュニティが共に協力し合うようになったりすることがあげられる。

c. 研究によって、コミュニティ参加者が本当の意味でのアクションを起こすプロセスが含まれているか？

* よくあることは、研究者は論文をだし、有名になるがコミュニティは不幸せのまま。

6. 研究データと結果の共有

コミュニティ参加者に直接の恩恵があることがParticipatory Researchにとって重要であったが、その意味で研究データや結果は、教育的であり、かつ社会変化ベネフィットを含むべきである。時に研究結果の意味についてコミュニティ参加者と外部研究者は異なった見解を持つ。研究当初にまた、ひとたび研究結果が集約されたらコミュニティ参加者と外部研究者は彼らがそれぞれどのように研究結果を利用するか決めなくてはならない。

a. コミュニティ参加者は研究プロセスや結果から何らかの恩恵を受けているか？

b. 研究データの解釈において、研究者とコミュニティ参加者との間に相違があったならば、公正でかつ開か

れた方法で解決しようという同意がされているか？

c. 研究データ(結果)をどのように共有するかに関して、コミュニティ参加者と研究者の間にはっきりとした同意が確認されているか？

*たとえば研究者が論文を書きたいと思っても、時にはコミュニティ参加者にとっては、不都合なデータであり、結果を公表されることを嫌がる場合も考えられる。そのためにも、研究結果の共有についてあらかじめ同意をしておくことが大切である。また、共有という意味からも、報告書にはすべての参加者の名前を載せることが望ましい。

d. 調査結果の普及に関して、調査者とコミュニティ参加者の間に明確な同意がされているか？

*参加型研究にはその結果を普及するために様々な方法が考えられる。たとえば学術雑誌だけでなく、一般誌、新聞に投稿すること、さらに、TVショーや子どもが学会のワークショップに出て発言するなども考えられる。これらに関して、双方の同意が重要なのである。

まとめ

参加型研究は他の研究に比べ、時間がかかり、研究者とコミュニティメンバー両者の努力が必要なこともまた事実である。しかしながら、これからの研究の1つの方向を示していることは確かなことであろう。本ガイドラインを研究者、コミュニティメンバーの両者が使用し、さらに検討を加えていくことが大切と考える。

謝辞

本論をまとめるにあたり有益なご助言を頂きました旭川医科大学の望月吉勝先生に感謝いたします。The Canadian guidelines were developed at the University of British Columbia Institute of Health Promotion Research in collaboration with Anne George, Mark Daniel, Carol Herbert, Bill Bowie and Michel O'Neil, and in consultation with researchers and practitioners across Canada.

<引用文献>

- 新井宏朋, 藤田雅美(1996); 政策科学としての公衆衛生学, 日本公衆衛生学雑誌, 43(7), 517-519
- Dilts, D.R.(1989); Action research from concept to practice: A study of action research applications within Indonesian community education and development programs. Unpublished doctoral dissertation, Amherst: University of Massachusetts.
- Frankish, C.J., A.George, M.Daniel, etal.(1996): Participatory Health Promotion Research in Canada COMMUNITY GUIDEBOOK, Health Canada.
- Fals-Borda, O.(1992); Evolution and convergence in participatory action research. In J.S. Frideres (Ed.), A world of communities: Participatory research perspectives (pp. 14-19). North York: Captus.
- Green, L.W., Gerge, M.A., Daniedl, M., Frankish, C.J., Herbert, C.J., Bowie, W.R., O'Neill, M. : Institute of Health Promotion Research The University of British Columbia and the B.C. Consortium for Health Promotion Research(1995); Study of Participatory Research in Health Promotion, The Royal Society of Canada
- Lewin, K.(1946); Action research and minority problems, Journal of Social Issues, 2, 34-36.
- 島根医大環境保健医学教室(1995); 「保健・医療・福祉連携システムに関する調査研究報告書」
- 塩飽邦憲, 山根洋右, 福島哲夫, 磯邊顕生, 北條宣政, 高同強, 王春潔(1997); 出雲市におけるヘルスケア政策確立のための参加型研究, 日本公衆衛生雑誌, 44(6), 463-473.

PARTICIPATORY RESEARCH IN HEALTH PROMOTION

Kanako OKADA, Ph.D.* , James C. FRANKISH, Ph.D.** , Lawrence W. GREEN, Ph.D.***

The purposes of this paper are: 1) to provide an overview of a participatory research approach as it maybe applied in health promotion in Japan. 2) to adapt guidelines for participatory research previously developed in Canada to the Japanese context.

For this paper, we define participatory research as systematic inquiry, with the collaboration of those affected by the issue being studied, for purposes of education and taking action or effecting social change. Most definitions of participatory research emphasize the integration of three elements: research (usually described as systematic investigation), education and action. During a participatory research project, an educational and learning process takes place. The research process is also capacity building in that it enables and supports the development of new skills and expertise among both community participants and external researchers. Participatory research tries to bring together the search for solutions to community health problems and taking action by using a community development approach, within the research process. Participatory research is a process rather than a specific methodology. Quantitative and / or qualitative can equally be applied in participatory research. Descriptions of early projects in the development of participatory research stress an equal relationship between community members and technically trained researchers. Rather than presupposing absolute equality between the researcher and the community participants, more recent descriptions of participatory research emphasize the unique strengths and shared responsibilities of each group. Arai (1996) explains "A Key characteristic of participatory research is that the researcher understand the feelings and desires of community members , investigate and practice to solve their health issue." And participatory research uses their feelings and desires and also community members will have the assessment their abilities.

The term community is defined in this context as any group of individuals sharing a given interest. This definition includes people who may or may not live close to each other but are linked by cultural, social, political, health and economic issues. This definition also includes the traditional concept of community as a geographic area. Terminology describing participatory research has developed from various disciplines during the past 20 years. Terms found in the literature are: Participatory Research (PR), Participatory Action Research (PAR), Action Research (AR), Participative Research, Conscientizing Research, Policy Oriented Action Research, Dialectical Research, Collaborative Inquiry, Emancipatory Research, Participatory Action Learning Research, Participatory Rural Appraisal (PRA), and others (see Dilts, 1989). In Japan, terms found in the literature are: "Sanakagata kenkyu" "Sanakateki kenkyu" "sankagata koudou kenkyu" (All are Japanese). This paper will use the term participatory research in English , although the many disciplines writing about similar approaches to research employ various terms. Those who first used participatory research and participatory action research in print consider the two terms to be synonymous (Fals-Borda, 1992). Fals-Borda saw no difference, but said the term "participatory action research" captured the idea of "action-research that is participatory, and participatory research that unites with action" (Fals-Borda, 1992). Both link community participation in the research processes with utility of newly created knowledge. The connotation of the added word "action" gives greater prominence to that element. Our use of participatory

* Chiba University (Associate Professor, Faculty of Education, 1-33 Yayoi Inage-ku Chiba Chiba Japan 〒263-8522)

** Institute of Health Promotion Research, University OF British Columbia (Canada)

*** Office on Smoking and Health, Centers for Disease Control and Prevention US Dept of Health and Human Services (U.S.A)

research includes the term participatory action research.

This paper will use the term “Sankagata Kenkyu” in Japanese. The following databases (93-97) were searched for Japanese applications on participatory research : Medline, Cumulative Index of Nursing & Allied Health (Cinahl), igakucyuuouzasshi (Japanese). Keywords used for the searches were: Participatory or “Sankagata” “Sanakateki (in Japanese)” + Research + Japan. No papers were found in the literature search of 3 keywords. 3 papers were found from 2 Keywords (Participatory + Japan).

The Canadian version of guidelines were then discussed with several Japanese researchers as they apply to the Japanese context. In order to revise the guidelines, they were discussed with 12 Japanese researchers who were familiar with participatory research. They discussed whether the Canadian Guidelines could / should be accepted and are needed by Japanese academics and community researchers of participatory research. They also discussed the actual contents of the Canadian guidelines. We conclude that the original guidelines in Canada can be used as a checklist by academic and community researchers in planning their projects (The Royal Society of Canada 1995). When we adapted the guidelines for participatory research developed in Canada, the following points were considered.

First, we converted the guidelines to make them into a checklist for planning the projects. Second, we attempted to consider the social and cultural circumstance of Japan. In selecting the words and questions. Finally, we added examples and explanations. With regard to the second step, important points arose, that is : Guidelines are needed because there is a lot of participatory action in Japan, but we do not have any clear definitions of participatory action and research. Guidelines are needed to determine the boundaries of each. : They will also be used as a guide for evaluations and researcher’s ethics.

Conclusion : Participatory research project has only recently begun in Japan. There is a receptive audience of health and educational professionals. We are working to further develop to the Japanese New Version of guidelines.

Key Words : Participatory Research, Community